

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	宮田 敏之
論文題目	戦前期タイ米経済の発展と構造 —タイ米の「品質」をめぐる一考察—		
(論文内容の要旨)			
<p>戦前期の資料では、タイ米が他の東南アジア産の米よりも品質がよく、それゆえ高い価格で取引されていたことを確認できる。本論文は高品質の「ガーデン・ライス」と呼ばれた米に光を当て、輸出向け米の貿易統計を規格別に再整理し、戦前期タイの米輸出経済発展の要因について、タイ米の品質という点から検討を試みた。</p> <p>第1章では、戦前期タイ米経済の発展を、時系列に沿って検証する。19世紀後半、アジア間貿易の発展にともない、香港やシンガポールを中継基地とする東アジアや東南アジアの米需要が拡大した。それに対応する形で、タイではチャオプラヤー・デルタを中心に米生産が増大し、米輸出が急速に伸びたことを整理した。さらに、タイの米輸出の拡大の背景には、ガーデン・ライスとして流通した移植米がその品質ゆえに海外市場で高く評価され、相対的に高い価格で取引されたという事情があったことも明らかにした。</p> <p>第2章では、戦前期におけるタイ米の輸出経済を分析する上での基礎資料たるタイの外国貿易統計の特徴とその変遷、さらに外国貿易統計を作成した関税局の歴史を検証した。</p> <p>第3章では、タイのガーデン・ライスの精米や輸出に関わったとされる陳金鐘 (Tan Kim Ching) のバンコクとシンガポールを結ぶ米のビジネスを検証した。陳金鐘は、シンガポールを本拠とする福建系華僑商人であるが、1870年代には、バンコクに精米所と米輸出商社を設立し、バンコクの米業界では「白米の精米業の先駆者」として知られた存在となり、一等白米 (No.1 White Rice)、すなわち、主としてガーデン・ライスとみなされる米の精米とその輸出を行っていた。</p> <p>第4章では、タイ米の欧州向けの輸出が停止するという1920年代末の異常事態に着目し、その要因を検証する。欧州向け米輸出の停止は、欧州系米輸出商社と華僑系精米所との間で、タイ米の品質低下の要因をめぐる対立が引き金となった。この時の米の品質は、米の品種の違いや農学的な成分の劣化ではなく、契約していた規格とは異なる輸出米の内容 (白米と碎米の混合比率の違い) という意味での品質の低下であった。こうした欧州向け米輸出の停止が物語るのは、品質が高く評価されたタイ米の取引では、その品質の維持が極めて重要であったということであった。</p> <p>第5章では、19世紀後半から20世紀初頭のタイにおける土地法制定の背景、および地券交付とその影響を検証した。ランシット地域以外のデルタでは、大土地所有制が発達せず、タイの農民は、水利、土壌、地形などの自然環境に応じて、稲の品種を選択</p>			

し、稲の栽培方法を自らの判断で対応しうる余地があった。こうした「小規模の独立した農民」による稲作が行われた背景として、地券交付を目的とした土地法の制定が20世紀初頭まで遅れ、その結果、土地の商品化が進まず、大土地所有制が拡大しなかった点に注目した。

最後に、ガーデン・ライスの輸出が可能となった背景と要因として、戦前期においてタイ政府が、米の生産・流通・精米・輸出について、過度の管理や介入をせず、その結果、農民、流通業者、精米業者、輸出業者が、自由な選択や自由な競争の下で、米の生産や米のビジネスに従事することができた点が重要であることを指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

米はタイの主要作物であり、20世紀前半まで同国の輸出の5割以上を占めていた。多くの農民が主食用と輸出用の米の生産に従事し、精米業者や輸出業者はタイの経済界で支配的な地位を築いていた。本学位申請論文は、戦前期タイの米輸出経済の発展を、米の品質に着目して検証しようとする試みである。19世紀中葉以後のタイからの米輸出増加は、従来の研究では、海外の需要増加と国内の米生産拡大によって説明されてきた。本論文は、それら既存研究の成果を踏まえつつ、「ガーデン・ライス」と呼ばれる高品質の米の存在がアジアの他の米輸出国との競争を勝ち抜いた重要な要因であることを、史資料の渉猟を通じて実証しようとした経済史的研究である。

本論文は次の点で学術的に高い価値を有する。第1に、戦前期タイの米の生産や輸出の拡大については、生産性を高めることなく、新田開発を通じた作付面積の外延的拡大によってもたらされたことと先行研究は指摘してきた。それに対して、本論文は米の品質という新しい視角から説明することに成功している。

第2に、タイの貿易統計と通関制度について、史資料を丹念に調べて問題点を解き明かしている。1855年のバウリング条約によって1856年に通関所が設置され、通関所は通関報告書を作成するようになったものの、その報告書の原典の所在が未確認である上に、報告書の統計数字も実態を反映していないことが指摘されてきた。このため、19世紀の貿易統計については、英国議会資料に含まれる領事報告にもっぱら依拠することが、イングラムの研究(1955年、増補版1971年)以降、了解事項になっていた。そうした事態を招いていた理由として、本論文は次のように指摘する。20世紀初頭にいたるまで複数の政府部局が輸出入税の徴税権を保有し続け、しかも中国系商人である徴税請負人が徴税実務を担当し、徴税業務自体が不透明なまま維持された。輸出入税を納税すべき貿易商人自身あるいはその関係者が通関所における徴税業務を行ったため、課税対象になる貿易品の量や金額も正確に把握されることがなかった。それゆえに、通関所の統計は実態から乖離したものになっていた。

第3に、米の貿易に関して、輸出先での量や価格について丁寧に調査して紹介している。その中には本邦初公開の情報も多く含まれている。主たる輸出先であったシンガポールでは1890年代には1ピクル(60.55kg)当たりの価格(シンガポール・ドル)がラングーン米2.68、サイゴン米2.61のところ、タイ米は3.07と高価格であったことを明らかにしている。高い評価は、米の品質に加えて、精米、輸出、海運、保険、販売を含むライス・ビジネス・ネットワークにも負っていたと指摘して、ネットワークの中心にいた陳金鐘について詳しく紹介している。シンガポール居住のこの福建系華僑は、一方ではタイの国王から欽賜名を与えられた官僚であり、他方では米業界の大物であった。本論文は、陳金鐘とその一族がタイ白米の精米の先駆者となっただけではなく、シンガ

ポール向けタイ白米輸出に先鞭をつけ、同時に、欧米人の精米技術者を雇い入れて、シンガポール市場において高値で取引されたタイの一等白米をブランド商品化することに成功したと評価する。

以上の通り、本論文は戦前期タイの米輸出経済の発展を米の品質から説明しようとする野心的な試みである。そのために、貿易統計と通関制度、シンガポールの福建系華僑、1920年代の輸出不振、土地法制定と地券交付といった多角的な論点についてきめ細かな実証を行っており、タイ研究ならびに東南アジア経済史研究へのきわめて重要な学術的貢献となっている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2023年2月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。